

二地域居住と地域づくり

葛谷 栄一（農的社会デザイン研究所）

1 二地域居住の経過等

1993年以降、平日は東京で仕事をし、週末は山梨市牧丘町で畑仕事を中心に過ごしている。牧丘町は甲府盆地の東京寄りにあり、秩父連山から雁坂トンネルを越えて甲府盆地の北斜面を下る途中にあって、盆地を挟んで富士山と向き合う。果樹栽培が盛んで、特にぶどうの巨峰やマスカットの一大産地として全国に知られる。車で往復するが、中央高速は調布ICと勝沼IC間を利用し、東京の西東京市にある自宅からの所要時間は1時間半弱。JR利用の場合の最寄り駅は中央本線の塩山駅となる。

90年に竹藪400坪を購入して開墾したもので、当時は耕作していない農地や空き家はあっても、売ったり貸したりすることは稀で、結局、自ら畑と建物を造作した。

91年の3月には竹藪の伐採を終えて、土地取得の条件とされた建屋基礎の造成工事も終えて家屋の建設を開始したが、仕事でその年の6月に熊本に転勤となったことから、二地域居住は東京に戻った94年1月からの開始となった。以降、金曜夜に山梨に入り、月曜朝（現在は月曜昼前）に東京に戻るパターンを30年以上続けている。

二地域居住を始めた理由は、“百姓”をしたい、自給とともに自然が豊かな中で暮らしたいという願望を長年引きずっており、40代をその節目と考えていた。40歳を過ぎた頃、ちょうど和笛の横笛に魅かれて演奏家・鯉沼廣行師に師事しており、たまたま牧丘町にある師の別宅におじゃましたのがきっかけとなった。農業振興地域であり開発されていないこと、そして家内の実家が長野県伊那市高遠町で、東京と高遠の中間に牧丘町があり、どちらにも同じぐらいの時間で行けることが、決定打となって行動を開始した。

農林中央金庫なる金融機関に勤めていたが、40歳代の後半に、望みながらもかなわずにきた系列のシンクタンクに出向となり転籍した。この仕事であれば牧丘町での経験・体験等も生かせそうということもあり、兼業というか複業的に二地域居住を捉え直し、会社をリタイアしても農的社会デザイン研究所なる看板を掲げて仕事と二地域居住を継続している。

2 二地域居住の中身

週末のメインは1反歩ほどの畑での自給用の野菜づく

りで、30代に出会った『わら一本の革命』の福岡正信の自然哲学と農法を基本に、“キッチンガーデン”に取り組んでいる。

2005年には、同じ牧丘町にある戦後まもなく建てられた農家家を借りて、東京の小学生を主たる対象に、1泊2日の合宿形式で「農香土（のどか）のいなか体験教室」を開始し、隔月で開催してきた。家内が当時、東京・立川で小学校教員をしており、農に触れる喜びや発見等を都会の子どもたちにも体験させてやりたいとして、トライアルしてきたものを本格化し、継続してきた。

また10年とちょっと前、牧丘町にあるB&G海洋センターで何か文化的な講座の開設ができないか相談があり、結局、月2回、リコーダー・アンサンブル教室を開くことになり、5人前後の少数ながら地元の女性たち（結果的に）とリコーダーの合奏を楽しんでいる。

したがって、最近の状況は、基本は金曜夜遅くに牧丘町に到着。牧丘町に3泊して、土曜の午前は農土香の清掃や庭の草刈りと100坪ほどの畑の管理。日曜は午前には自分の畑の管理、午後はリコーダーの教室が隔週で入るといった具合。

とはいえ、月1回は土曜の午前・東京の立川の小学校で家内がボランティアで小学生対象にお琴教室を開いており、私が尺八の伴奏とお琴を運ぶ係として一緒に行動しており、その時は牧丘町到着は土曜の夕方近く。また筆者の仕事柄、講演や講義等、そして尺八の演奏会が土日に入ることもしばしばで、牧丘町では1泊や2泊を余儀なくされることも多い。また基本通りではあっても、週末も原稿書きや資料への目通しに追われている。

3 地域との付き合い・関係

地域での付き合いについては、家を造ってもらった大工棟梁のHFさんとはよく酒を酌み交わしており、地元の情勢や歴史・風習等についての話が楽しみだ。HFさんはこの地域の長老の一人であり、また山梨市に合併する前の牧丘町で町会議員をしていたこともあって、当地での行動、関わり合い方等、すべて相談に乗ってもらっており、何かといえはすぐHFさんに電話、という感じの付き合いだ。また敷地の入り口に住むHYさんとのやり取りも頻繁だ。この辺の家は皆、自給用に野菜を作っており、しょっちゅう野菜をいただいている。さらに近

隣の町でブドウや桃を生産しているSさんが、北隣の畑を2年程前に購入し、奥さんが友達と一緒に野菜作りを始めたが、お互いに顔を見れば声を掛け合っている。また近くの旧商店の建物を作業所に利用して果樹生産をしているKさんからは、規格外れになった果実を購入させてもらうなど、当地での付き合いもそれなりに多い。

そこで肝心の集落（「室伏」）との関係なり距離であるが、これについては当初からHFさんと相談して、いずれ室伏に住民票を移した後に、集落のメンバーとして道端の草刈りや水路の管理等に参加すればいいと整理できている。組合費の納入と消防団への寄付はさせてもらっている。草刈り等に参加するのにやぶさかではないものの、家が道路に入って奥まったところにあり、かつ周り半分は竹藪となっているため、作業をしているのが見え、音もほとんど聞こえないこともあって、参加していないのが実情だ。

当初は、いずれ牧丘町を中心に生活することを想定しており、住民票を移すつもりでもいた。ところが東京の地元・西東京市で、断り切れずに自治会会長に就任し、既に7年継続しており、また現在、市南部地域協力ネットワーク代表もさせられており、住民票を移すわけにいかず、住民票を移す環境にもない。どうも最後まで住民票はこのままとなりそうだ。

こうした中で、地域とのつながりを強く実感してきたのが「農土香（のどか）のいなか体験教室」である。合宿可能な民家を借りて「農土香の子ども体験教室」をスタートしたのは05年である。その前からトライアルはしていたが、空き家はあっても借りることができずにいたところ、HFさんを通じてその親戚のUさんの持ち家を紹介してもらったもので、Uさんには農土香の家から畑の管理まで全面的にお世話いただいていた。また東京からJR中央線に乗って塩山駅で降りた子どもたちの農土香と駅や温泉への往復等で、移住者も含めた地元の皆さんに車を出していただき、また差し入れをいただいたりと、何かにつけお世話になってきた。しかしながら、Uさんはだいぶ前に高齢のためリタイアし、畑の管理は筆者がやるしかなくなり、週末、二か所の畑の管理はけっこうな負担となっている。車等で応援いただいていた人たちが次第に高齢化してお願いできる状況ではなくなってしまい、現在は東京からの参加者の親に電車ではなく、車で駆けつけてもらってお手伝いいただいている。

また子ども体験教室の田植えと稲刈りは、自ら水田を管理してはいないことから、農土香から車で20分ほどの大菩薩峠の麓にある洗心道場の田んぼを利用させていただいている。洗心道場は、その少し上にある雲峰荘な

る温泉旅館の社長・林金次さんが運営してきたもので、耕作放棄されつつある農地をお年寄りが集まって預かり、稲作を中心に野菜も生産しており、その一部を子ども等の体験の場に提供してきた。林さんは5年前に亡くなり、その後は林さんの思いを引き継いだ何名かで管理を続けている。林さん亡き後、コロナの影響もあって田植え等の参加者は激減したが、農土香の子どもたちは毎年、必ず田植え・稲刈りを行ってきたことが下支えとなり、次第に参加人数は回復してきた。田植えや稲刈りにあたっては、洗心道場に関わるお年寄りたちが、子どもたちのために昼食づくりをして振る舞うのが楽しみ・生き甲斐、また日常の農作業の励みになっている、という話もいただいている。

なお、子ども体験教室には地元の子どもたちにも参加を呼びかけ、ガラス細工等を一緒にやったこともあったが、東京から来た集まりに個別に参加するのはハードルが高いようだ。

4 二地域居住についての若干の考察

実際の二地域居住をめぐる経過・体験・実情等を紹介してきたが、最後に二地域居住の意義等について考えるところをいくつかあげておきたい。

第一に、二地域居住といってもその内容には大きな幅がある。別荘的なものと定住し本格的農家を目指すものとは、地域とのかかわり合いは大きく異なってくる。それぞれの事情や考え方によって違って当然であるが、二地域居住は地域とのかかわり度合い以上に、その人の心身のバランスやエネルギーの発揮につながっているかがまずは肝心と考える。

第二に、地域との組織的な交流ということでは、大人以上に子どもの存在が大きく、子どもが農村・都会双方の交流の扉を開く大きな能力を発揮してくれることを実感する。ただし、地元の子どももこれに参画させていくためには農村側の組織的な理解と協力が不可欠だ。

第三に、総括的に言えば、都市化がすすみ、緑の少ない人為的な空間の中で、すべてを分業化し、貨幣で購入するのが当然とする中で、都市住民が心身のバランスを失ってしまうのは当たり前であり、それは自然との関係を取り戻そうとする体が発する信号でもある。心身のバランスを回復させながら、その先に農村の維持、担い手の確保も含めて、移住・定住を拡大していくことを必須とする流れを構築していく必要がある。関係人口を増加・深化させていくステップの一つとして二地域居住を位置づけ、増加させていくことが重要だ。そしてその総体が地域づくりにつながってくるものと考えられる。